

1月26日 マタイによる福音書4章12～17節

「宣教の始まり」

今日の聖書箇所には、異邦人の地であったガリラヤから宣教を始めるイエス様の姿が記されています。私たちの教会の日々の宣教の業は、教会に集まる私たち一人一人の「日常の言葉や態度」に宿っていると思います。そのことを、福音書のイエス様の言葉と態度が示しているのです。イエス様は、嘘をつく方ではありません。イエス様は、律法の表面上だけを守り、神様の御心をないがしろにするユダヤ人に対して批判の言葉をかけますが、それはイエス様自身の好き嫌いと言う感情によるものではなく、「神様の御心を優先できているか」という、神様の元にある基準によって語られていた言葉でした。そのように、イエス様はいつも人々に誠実に接し続けた方でした。

そのイエス様の言動に倣うことによって、私たちもイエス様と同じように、人々をイエス様のもとに導く宣教活動を行うことが出来るのです。ただ、気を付けなければいけないのは、私たちは感情によって突き動かされた時に、思ってもいない言葉が衝動的に出て来てしまったり、無意識のうちによくはない態度を取ってしまうことがあるのです。普段から相当に気を付けていないと、私たちは容易に、感情に従う「楽な事」を行ってしまうのです。例えば表情、私たちは意識をすれば表情を作ることが出来ますが、無意識であれば無表情になったり、感情がそのまま表情に現れてしまいます。例えば声色、意識をすれば大きい声にも小さい声にもできますが、無意識であれば感情によってかっとなり声を荒げてしまうことがあります。そして言葉遣い、私たちは意識をすれば丁寧な言葉を選び、聞く人が「この人は誠実な人なんだ」「クリスチャンって素敵なお人なんだ」と思ってもらえることが出来るのです。だからこそ、私たちには、「私たちの人生すべてが神様によって見られている」という意識と、「私たちのすべての言動が、イエス様を信じる人を増やすかもしれない／減らしてしまうかもしれない」という意識を、いつも持つておく必要があるのです。

ただ、いつも肩に力を入れていると、いつも正しく生きようと意識し続けていると、私たちはどうしても疲れてしまうものです。だからこそイエス様も、時折山に登り一人になって、「神様とだけ語りあう時間」を取っていたのかもしれませんが。その時だけは、すべての言葉が「自分の言葉」となってもいい、すべてをさらけ出して、その胸の内の疲れや苦しみを打ち明けてもいい、そんな神様と自分だけの時間を作るのもいいことだと思います。礼拝や祈りがその時間になればいいと思いますし、本当に自分一人だけの時間を作ることもいいと思います。そうしてまた日常を、「このすべてが宣教だ」と意識をしながら歩みだす、それが神様の望んだ、私たちの信仰の形なのだと思います。

私たちには、それを成し遂げるだけの力が与えられています。そのことに強められながら、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：マタイによる福音書 4 章 12～17 節

- 12:イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。そして、ナザレを去って、ゼブルンとナフタリとの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。こうして、預言者イザヤを通して言われたことが実現したのである。「ゼブルンの地とナフタリの地 湖沿いの道、ヨルダン川の向こう 異邦人のガリラヤ 闇の中に住む民は 大いなる光を見た。死の地、死の陰に住む人々に 光が昇った。」その時から、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。